

171 フランスと日本の寄木細工（2023年6月27日）

フランスの古城を見学していたときに、何色もの木材が幾何学的な模様を作るようにはめ込まれている寄木張りの床があることに気がしました。フランスの美術館では、芸術性の高いマルケトリ技法（寄木細工）を使った美しい家具を展示しています。マルケトリ技法とは、図柄の部分の部分を薄くくり抜いて、そこに色や木目が異なる木材をはめ込んで模様を描くものです。これ



らの家具の優雅さとフランスの職人による巧みな技に惹かれて、美術館や古城を見学するときに、マルケトリ技法を使った家具や寄木張りの床に注目するようになりました。

寄木張りの床を見たときに、箱根の寄木細工を思い出しました。これは、箱根で作られている伝統工芸品です。写真右の箱は、幾何学的な模様ができるように様々な色や木目の木材を寄せ集め、その表面を特殊なカンナで薄く削り、幾何学模様の薄い板を箱に貼り付けて作られています。箱根の寄木細工にも、糸状の細い



のこぎりで図柄の部分をくり抜き、同じ形で異なる色の木材をはめ込む木象嵌という技法があります。この技法では、マルケトリ技法と同じように曲線を使った図柄を描くことができますが、寄木細工と言えば、幾何学的な模様が最も知られています。

パリ郊外のメゾン＝ラフィットにあるメゾン城で寄木張りの床を見たときに、美しい図柄とグレー色の素材が使われていることに驚きました。木材でどのようにグレー色を出しているのかと不思議に思いましたが、これは木材ではなく錫でした。調べてみると、フランスのマルケトリ技法は、金属、貝、象牙や石などの木材以外の素材も使う技法ですので、木材と一緒に錫が使われていることは何ら不思議



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

議なことではないのでしょう。しかし、私は、寄木細工に木材以外の素材を使うという考えがなかったので、とても印象に残りました。

フランスでは、17 世紀から 18 世紀にかけてマルケトリ技法を使った家具が最も盛んに制作されました。ルーブル美術館にある机（写真右）は、18 世紀にパリで作られたもので、日本の漆という異素材も合わせて使われています。



19 世紀後半になると、アール・ヌーボーが流行して、マルケトリ技法を使った絵画のような家具が数多く制作されました。パリ装飾芸術美術館に展示されているピアノ（右）は、アール・ヌーボーの中心であったナンシーで活躍した画家のヴィクトル・ブルーヴェがデザインをして、ナンシー派を代表する家具職人であったルイ・マジョレルの工房で作られたものです。歌の一節の文字もマルケトリ技法で表現されており、絵の具で描いた絵画ではないかと思間違うほど見事な作品です。



フランス人も日本人も、木目の美しさや木材による色の違いに惹かれたことは共通しますが、その表現方法の違いが興味深いと思いました。